

加者から述べられた。現在、マンガウムの造林は、短伐期によるパルプ、MDF用が主目的であるが、伐期の延長により形質の良い中径木が計画的に出材されれば、用材としての利用も大いに期待されるであろう(写真5)。最後に、小さな国際会議にもかかわらず各国から参加して下さった方々、及びUSMとJIRCASの組織委員に感謝の意を表します。

図書紹介

◎マングローブ入門—海に生える緑の森—中村武久・中須賀常雄著 A5版
234pp. KK めこん, 東京 1998.4刊 定価1,500円(税別)

本誌を読まれる方でマングローブを知らない方はおられないと思う。その位最近ではマングローブは広く知られるようになったが、マングローブのすべてといった啓蒙書となると数が少ないように思う。実際、本書巻末の文献を見ても、書店の店頭でめぐりあえるものは限られている。そんな中で本書が公にされたことは大変意義深い。巻頭の素晴らしいカラー写真で始まる本書は、読物としても大変面白く書かれており、思わず引き込まれるように読み進める。マングローブ入門、マングローブと人間のかかわり、地球環境とマングローブ、未来へ残そうマングローブ、世界のマングローブ植物の5章から成る。著者の一人が巻末で述べておられるように、中心的な話題はマングローブの植物学、生態学、および保全であるが、読み進むほどに、マングローブの分布と生い立ち、植物としての特徴、その生態系の様相、利用の実態とその環境、地球環境としての役割、保護し造成法などの幅広い情報が、平易な文章と数多くの写真や図で丁寧に記述されている。また第5章では、14科52種の代表的なマングローブ植物が図解入りで解説されており大変便利である。私ごとで恐縮であるが、筆者が初めてマングローブを見たのはタイの南端に近いサトゥンで、いまから26年前のことである。折角来たのだから見ていくようにと案内された入江で、オオバヒルギの1m近い胎生種子に目をみはったが、肝心なマングローブ林は伐採が進んでおり、すぐ近くで白煙をあげていた巨大な窯から出てくる炭は日本企業の買い付けを待っているとのことであった。本書を読んで、当時タイのマングローブ林が回帰年30年で皆伐されていたことを知ったが、予想されたようにうまく再生されているものか気になるところである。(浅川澄彦)